

# 「地域共創の学びと活動」の評価・検証の試み

—公益社会演習（とび魚だし）を事例に—

伊藤 真知子・呉 尚浩

## 1 問題の設定

飛鳥のとび魚だしを使っためんつゆの商品開発・販売戦略に、「ぜひ何らかの形で協力いただけないか」とお誘いがあったのは、2009年3月末のことだった。それから丸3年。とび魚だしプロジェクト（2011年7月まで「あごだしプロジェクト」）が立ち上がり、2010年度には新設科目「公益社会演習」の一演習として正課に組み込まれた。2012年3月末までに、27名の学生（院生1名含む）が、「絶品とび魚だしめんつゆ 贅沢ストレート」をめぐる学びと活動を行ってきた。

東北公益文科大学（以下「公益大」）は、山形県と庄内地域の14市町村（2001年開学当時）が施設整備等を費用負担し、学校法人が運営する「公設民営」の私立大学である。公益という視点で社会を見直す公益学の創造・発展、公益実現の社会を構想し実践する人材の育成を目標に、教育・研究を進めている。同時に、地域と密接にかかわり地域に開かれた大学として、「大学まちづくり」に取り組んできた。「庄内全域が皆さんのキャンパスです」（酒田市長、2001年度入学式）という言葉に象徴される、地元からの熱い期待があり、地域住民の温かなまなざしと支援に支えられて、学生たちは、さまざまな地域活動やフィールド（現場）での学びを体験してきた。地域と共創・協働する教育・研究活動が多様に展開されてきたのである<sup>1</sup>。2006年、その拠点として地域共創センターが設置され、地域と大学をつなぐ窓口として機能してきた。「地域共創」という新しい言葉とともに、公益大の地域との先進的な連携活動は全国に発信・評価されていった。2009年「大学の地域貢献度ランキング」（日本経済新聞社産業地域研究所）では全国の754大学のなかで第9位となった。

中央教育審議会が、大学の社会貢献を「第三の使命」と位置づけ答申したの

は、2005年のことである。研究・教育を長期的視点で見たうえでの「社会貢献」とするだけでなく、より直接的に、大学の立地する地域社会や経済社会、さらには国際社会へと貢献することが、大学の重要な役割とされるようになった。2001年からこの新たな役割に意識的に取り組み、他に先駆けて「大学まちづくり」「大学地域論」等を展開してきたことが、公益大への高評価につながったといえよう。

現在では、多くの大学が地域活動、地域と連携した教育に取り組むようになっている。では、それらは大学教育として本当に成果をあげているといえるのだろうか。その成果をどのように評価したらよいのか。このような問いが、地域と連携した教育に先進的に取り組んできた大学関係者から発せられるようになっている。たとえば、上のランキングで「地域貢献に熱心と思われる上位大学」第1位（2011年）の松本大学が主催する「地域連携教育をめぐる評価・検証の研究会」は、そのような問題意識で開催されている。松本大学総合経営学部木村晴壽学部長は、地域連携教育をめぐる評価の視点として、(1) 地域活性化の視点、(2) 大学教育の視点、(3) 自覚の視点、(4) 大学づくりの視点の4つを挙げている<sup>2</sup>。(1)は、「地域の活性化に貢献しているか」「大学としての社会貢献になっているか」等、地域社会からの評価である。(2)は、大学教員からの評価・検証であり、大学が目標とする人材育成の観点から、「地域社会の発展に貢献する能力を育成しているか」「学士たるに相応しい能力の育成に役立っているか」を問うものである。(3)は、学生自身による検証・評価であって、大学教育を受ける側として、「自分がめざす人物像に近づいている実感を持てるか」「自分が目指す職業への自信が持てるか」「社会と自分との関係を鮮明に意識できるか」等である。(4)は、魅力ある大学づくりという大学の運営・経営への貢献という観点からの評価・検証である。

ここでは、主に(1) 地域活性化の視点、ならびに(3) 自覚の視点から、公益大の演習科目「公益社会演習（とび魚だし）」の実践について検証してみたい。公益大が積み重ねてきた「地域共創の学びと活動」の評価・検証の必要性を感じているからであり、「学士力」（中央教育審議会）、「社会人基礎力」（経済産業省）等の議論が盛んになっている現在、大学教育の成果そのものを問う手がかりになり得ると考えるからである。

方法としては、三輪建二の「実践記録を積み重ねてはおたがいに語りあい、長期のスパンに立った実践と省察のサイクルをみずからに課すと同時に、そのような学習活動の組織化にかかわる営みをくり返して」いくという「実践研究」<sup>3</sup>を参考に進めていく。

構成は、2において、「公益社会演習（とび魚だし）」およびそれを含めた「とび魚だしプロジェクト」の実践について紹介し、3では、実践の成果について検証を行い、4において、飛鳥と大学・学生のかかわりという観点から、プロジェクトおよび演習の位置づけと意義を考察し、終わりに、今後の課題について述べる<sup>4</sup>。

## 2 公益社会演習（とび魚だし）の取組み

### 2.1 あごだしプロジェクトの誕生（2009年度）

飛鳥のとび魚だしめんつゆの取組みは、2009年4月、「農商工等連携促進法」にもとづく農商工等連携事業計画として認定申請され、6月、国からの認定が決定した。山形県農村工業農業協同組合連合会（JA山形農工連）、山形県漁業協同組合に加えて東北公益文科大学が連携参加者となり、酒田市飛鳥産の炭火焼・天日干しのとび魚を使っためんつゆの商品開発と販路開拓を目的とする農商工連携等事業計画が認定されたのである。

農商工連携とは、「農林漁業者と商工業者が通常の商取引関係を超えて協力し、お互いの強みを活かして売れる新商品・新サービスの開発、生産等を行い、需要の開拓を行うこと」をいう。農商工連携等事業計画は、農林漁業者、商工業等を営む中小企業者が連名で申請する。国の認定基準は、両者の有機的連携、お互いの経営資源の有効活用、新商品・新サービスの開発、両者の経営の改善の実現等である。認定されてはじめて、補助金申請が可能となる。2009年当時、大学が連携参加者となる計画は全国でも珍しいとのことだった。

同年10月、2009年度の補助金交付が決定、具体的に事業が開始された。

11月、大学において、プロジェクト結成にむけた、とび魚だしのめんつゆの試食・求評会が開催された。学内で昼休みに200人分の試食・アンケート調査を行い、同時にプロジェクト参加学生を募集した。ここに応募した学生4名が、

11月末の初めての東京での商談会に、教職員、JA山形農工連職員とともに参加。マーケティング・販路開拓に着手した。ここからプロジェクトがスタートしたのである。この時点では、全国展開をめざして、全国的にとび魚のだしを指す言葉として通りのよい「あごだし」をプロジェクト名とした。

当初試作されたとび魚だしめんつゆは、次のような商品特性をもつストレートタイプのつゆであった。

- 山形県飛鳥産、炭火焼・天日干しとび魚を使用
- ミネラルたっぷりの日本海海洋深層水を100%使用
- こだわりの「本返し製法」、一番だしのみを贅沢に使用

さらに「化学調味料無添加」とすることをプロジェクト会議（学生・教職員、JA山形農工連、山形県企業振興公社等が参加）で大学側から提案した。「贅沢・ストレート」のうえに「健康・ヘルシー」「安全・安心」をプラスすることで、より高級感が増し、アピールできると考えたためである。これを受けて、JA山形農工連の開発部スタッフが努力を重ねた結果、「化学調味料無添加」の試作品ができあがり、上記に、次の一行が加わった。

- 素材本来の味を引き立たせる化学調味料無添加

さて、3年間にわたるプロジェクトでの学生たちの活動は、①とび魚漁から下処理、炭火焼き、天日干しという、原料となる焼干し加工の過程、②工場におけるだし取り、「かえし」と合わせる本がえし製法、ホット充填等の「とび魚だしめんつゆ」の商品開発・製造過程、③パッケージや販促グッズ等の販売戦略の企画・実施、④商談会等での販路開拓・販促活動という、とび魚の加工から製品化、販売までのほぼすべての過程に参加し体験するというものであった。当然ながら、それは学生たちの活動・学習のために設定されたものではなく、いずれも、携わる人々の生活のかかった仕事の間、真剣勝負の間である。

## 2.2 公益社会演習の開講（2010年度）

2010年度（平成22年度）、公益大のカリキュラムに、「公益社会演習」が新設された。分野融合のプロジェクト型演習科目であり、一つの演習を分野の異なる複数の教員（他大学を含む）で担当する。半期（セメスター）ごとにテーマの異なる複数の演習が同時開講され、地域・自然のなかでのフィールドワー

クやワークショップ等を実施しながら、学問領域を超えて、地域の公益的な問題解決のための提案や活動を行う。そのため、コミュニケーションやグループワーク、ワークショップ等の手法の基礎を実践的に学ぶ「共創の技法Ⅰ」を修得済みであることが履修要件となっている（2013年度まで同時履修可）。

2010年度前期に、あごだしプロジェクトの活動の一部を「公益社会演習（とび魚だし）」として開講した。2011年度、2012年度も引き続き前期に開講している<sup>5</sup>。伊藤真知子、呉尚浩の2名の教員が担当し、両名とも地域共創コース所属であるが、伊藤はインタビュー等の社会調査の手法、呉は飛島の鳥づくり・環境保全という異なる専門の立場から、科目運営を協働で進めている。とび魚だしの製造技術やマーケティング等の分野は、外部講師に依頼している。

### 2.3 公益社会演習（とび魚だし）のねらいと目標

これまで開講した3期のテーマは、2010年度前期「飛島の『とび魚だしめんつゆ』の商品開発と地域活性化」、2011年度前期「飛島の『とび魚だしめんつゆ』の販売戦略と地域活性化」、2012年度前期「飛島の『とび魚だしめんつゆ』の販売促進と地域活性化」である。ここに見られるように、「公益社会演習」では「地域活性化」を明確に打ち出している。農工商等連携自体、地域振興をねらいとしているが、演習ではより鮮明に、とび魚の産地である酒田・飛島、さらには庄内地域、山形県の地域活性化を課題とし、学生たちの学びと活動が、活性化に寄与することをめざしている。とび魚だしめんつゆの商品開発・販路開拓による売り上げ拡大による経済効果はむろんのこと、その過程に学生が関わることで、新しい関係性やつながりなど、地域に何らかの影響を与え変化をもたらすことを期待した。

しかし、あらかじめ設定した15コマ相当の授業計画に沿って進める演習で期待できる成果には、おのずと限界がある。地域に何らかの変化をもたらすことを期待しても、演習のみでの到達は困難であろう。そこで、演習はあくまでプロジェクトの一環であり、演習内に収まりきれないさまざまな活動を学生の自主参加によるプロジェクト活動として、継続的に進めてきた。

このように「正課の公益社会演習」と「自主参加のプロジェクト活動」を車の両輪として運営することにより、確実に毎年新しいメンバーを加え一定の内

容を修得することと、年ごとに発展する地域共創活動をより効果的、実践的にする仕組みを実現した。

表1に、公益社会演習（とび魚だし）の実施状況とプロジェクトの主な活動を掲げた。

表1 プロジェクトと公益社会演習の経過

年 月 日	プロジェクト	公益社会演習
2009年度		
11月17日(火)	とび魚だし試食・求評会	
11月26日(木)	「地方銀行フードセレクション」東京ビッグサイト 学生4名参加	
12月11日(金)	第1回あごだしプロジェクト会議	
2010年		
1月14日(木)	「かえし」製造体験 JA山形農工連 学生1名参加	
1月21日(木)	だし取り製造体験 JA山形農工連 同6名	
1月22日(金)	ろ過・充填製造体験 JA山形農工連 同8名	
2月8日(月) ～10日(水)	「第3回地域資源セレクション」東京ビッグサイト 学生3名参加	
2月18日(木)	第2回あごだしプロジェクト会議	
2月20日(土) ～22日(月)	「YBCおいしいものフェア」山形ビッグウイング 学生6名参加	
3月2日(火) ～5日(金)	「FOODEX JAPAN 2010」幕張メッセ 学生6名参加	
2010年度		
4月14日(水) ～7月21日(水)		①ガイダンス「飛鳥の「とび魚だしめんつゆ」の商品開発と地域活性化」履修学生14名
4月27日(火)	第1回あごだしプロジェクト会議	
5月8日(土)	大学コンソーシアムやまがた「ゆうキャンパス・ステーション」オープン行事 学生2名参加	
5月19日(水)		②とび魚という地域資源を活かした農商工連携事例(外部講師:富樫滋氏)
5月26日(水)		③原料から製品までの製造工程(JA山形農工連における製造体験(1)、外部講師:高橋基義氏)
6月	あごだしTシャツ制作(半袖)	
6月1日(火)	試食・求評会および記者発表「ネーミング発表」	
6月2日(水)		④「とび魚だしめんつゆ」の特性と調理方法
6月16日(水)		⑤商品の流通とブランドづくりJA山形農工連における製造体験(2)、外部講師:高橋基義氏)
6月18日(金)	第2回あごだしプロジェクト会議	
6月30日(水)		⑥飛鳥における漁業と生活の課題
7月7日(水)		⑦調査・取材方法、フィールドワーク・ガイダンス
7月10日(土) ～11日(日)		⑧～⑬飛鳥合宿(1泊2日)学生16名、教員3名参加 踏査、聞き取り調査、とび魚漁見学・体験、焼干し体験、現地報告会

年 月 日	プロジェクト	公益社会演習
7月14日(水)		⑭聞き取り調査・写真分析・報告会準備
7月21日(水)		⑮関係者報告会
8月7日(土)	オープンキャンパス パネル展示&試食会	
8月26日(木)	第3回あごだしプロジェクト会議	
9月7日(火) ～10日(金)	「東京インターナショナルギフトショー」 東京ビッグサイト 学生3名参加	
9月22日(水) ～23日(木)	地域と連携したひとつくりと大学教育フォーラム (松本大学) 学生5名活動報告	
10月23日(土)	「三川町産業フェア」なの花ホール 2名活動報告	
10月23日(土) ～24日(日)	公翔祭模擬店(玉こんにゃく)出店	
10月27日(水)	「ビジネスマッチ東北2010」夢メッセみやぎ パネル出展	
11月29日(月)	第4回あごだしプロジェクト会議	
11月29日(月)	模擬店反省会&利きだし会	
1月21日(金)	第5回あごだしプロジェクト会議	
2月8日(火)	「地域資源セレクション」東京ビッグサイト 1名	
2月10日(木)		「公益社会演習合同報告会」301教室
2月11日(金) ～13日(日)	「YBCおいしいものフェア」山形ビッグウイング 学生6名参加	
2月19日(土)	料理教室「とび魚だしdeクッキング」 酒田市交 流ひろば 学生5名、講師1名、一般親子6名	
2月22日(火) ～25日(金)	「国際ホテル・レストランショー」東京ビッグサイト 学生5名参加	
2月26日(土)	「公益大ウィークin山形2011」遊学館(2/22～ 3/6)学生4名参加、活動報告	
3月3日(木) ～4日(金)	「FOODEX JAPAN 2011」幕張メッセ 学生4名参加	
3月9日(水)	第6回あごだしプロジェクト会議	
2011年度		
4月27日(水)		①ガイダンス「飛島の『とび魚だしめんつゆ』 の販売戦略と地域活性化」履修学生12名
5月10日(火)	第1回あごだしプロジェクト会議	
5月18日(水)	「とび魚だしめんつゆ」の味の調整に関する比較検 討会。学生12名ほか関係者計36名参加	②庄内地域の農水産品のマーケティング 戦略(外部講師:尾形恵子氏)
5月25日(水)		③原料から製品までの製造工程(JA山形農 工連における製造体験、外部講師:高橋基 義氏)
6月	新Tシャツ制作(長袖)	
6月1日(水)	NPO法人にこっと発行の「itteki-Map+」7月号「夏 休み最強お昼ごはん術」取材 学生11名参加	
6月8日(水)		④商品と地域の魅力を生かす販売プラン
6月10日(金)	第2回あごだしプロジェクト会議	
6月15日(水)	「新レシピ開発&試食・交流会」宮野浦学区コミュ ニティ防災センター 学生10名参加	⑤飛島の現状と焼干しをめぐる課題(外部 講師:林久美子氏)
6月22日(水)		⑥調査・取材方法の学習
6月29日(水)		⑦フィールドワーク・ガイダンス
7月2日(土) ～3日(日)		⑧～⑪飛島合宿(1泊2日)学生12名、教員 2名参加 踏査、聞き取り調査、とび魚漁 見学・体験、焼干し体験、現地報告会

年月日	プロジェクト	公益社会演習
7月13日(水)		⑫⑬聞き取り調査分析・まとめ・報告書作成
7月16日(土)	オープンキャンパス 試食会 学生5名参加	
7月20日(水)		⑭まとめ(報告会準備)、⑮関係者報告会
8月7日(日)	オープンキャンパス 試食会 学生7名参加	
8月22日(月)	「とびしま未来協議会」飛鳥総合センター 学生1名	
9月22日(木)	第3回とび魚だしプロジェクト会議	
9月28日(水)		公益社会演習後期ガイダンス 学生12名報告
9月28日(水) ～29日(木)	仙山交流味餐復興市(仙台市句当台公園)とびしま 未来協議会ブース 学生2名参加	
10月8日(土)	「Next Ymagata キックオフミーティング」ホテル・ キャッスル 学生1名活動報告	
10月22日(土)	「和風ぶっ飛びバーガー」試食会 公翔祭・福幸市 学生6名参加、アンケートに93名が回答	
11月1日(火) ～2日(水)	「地方銀行フードセレクション2011」東京ビッグ サイト 学生4名参加	
11月22日(火)	第4回とび魚だしプロジェクト会議	
11月26日(土) ～27日(日)	「アイランダー2012」池袋・サンシャインシティに てとび魚だし販売 学生2名参加	
2012年 1月16日(月)	新たなフィッシュバーガーのネーミングを「SKT バーガー」に決定 学生10名参加	
1月～2月	パンフレット制作 学生が企画から印刷まで担当	
2月11日(祝) ～13日(月)	「YBCおいしいものフェア」山形ビッグウイング 学生1名参加	
2月16日(木)	第5回とび魚だしプロジェクト会議	
2月24日(金)	「SKTバーガー試食会」コープなかのくち店 学生5名参加	
2月25日(土)	「公益大ウィーク2012 庄内会場」酒田市総合文 化センター 学生2名参加、活動報告	
3月4日(日)	「公益大ウィーク2012 山形会場」遊学館 学生5名参加、活動報告・パネルディスカッション	
3月6日(火)	パンフレット(A4判三つ折)完成、納品	
3月6日(火) ～9日(金)	「FOODEX JAPAN2012」幕張メッセ 学生5名参加	
3月15日(木)	第6回とび魚だしプロジェクト会議	
3月15日(木) ～20日(祝)	「SKTドッグ実演販売」新潟伊勢丹地下食品売場 学生3名参加	

演習(15コマ)の流れは、教室でとび魚だしの特性や農商工連携などについて学び、工場において実際の製造工程を体験・見学、飛鳥の漁業や生活の現状・課題や調査・取材方法を学んだうえで、1泊2日の飛鳥合宿においてインタビュー調査、とび魚漁・下処理・炭火焼・天日干しの作業体験、島民との交流・報告会を行い、大学に戻って合宿で得たデータを分析、それをもとにとび魚だしのストーリーづくり等、販売戦略を練り、ここまでを報告会にてプレゼンテーションして、最後に個人レポートをまとめるというものである。おおまかな流れは3年間ほぼ同じである。というのも、2年目、3年目と続けて履修し



て学びや活動の深まっていく学生がいる一方で、毎年新しい学生（主に2年生）が加わるからである。基本的に同じ流れをたどりつつ、全体としては年々、学習内容や活動のレベルアップを図っている。演習の運営自体も、教員が主導し指導する形から、しだいに、上級生（経験者）が中心となり、学生が主体的に運営する場面が増えてきた。

学生個人の到達目標は、一つはスキルの獲得である。2012年度シラバスには、「調査・取材・課題発見」「ワークショップ運営・ファシリテーション・提案とりまとめ」「プレゼンテーション」「企画・立案」の習得度が評価基準として明記されている。もう一つは、活動のなかで課題に気づいて設定し、それをみずから（仲間とともに）調べ学んで、解決策を模索するという学びの主体性の獲得である。

## 2.4 とび魚だしプロジェクトの実践

公益社会演習を含めて、プロジェクトはどのような活動を積み重ねてきたのだろうか。上述した4段階のプロセスに沿って、ふり返っていこう。

### ① とび魚の焼干しづくり

6月中旬から7月中旬までの約1ヵ月、飛鳥近海にとび魚がやって来る。九州から山陰、北陸にかけての日本海沿岸で獲れるとび魚は「あご」と呼ばれ、煮干しにされた「あごだし」として知られる。とび魚が日本海を北上し、産卵を控えて油がのり大型となって現れる、その北限が飛鳥である。この時期、島の漁師たちは午前3時前から船を出し、前日の夕方仕掛けた刺し網による漁に勤しむ。港に戻り、網からとび魚をはずし、すぐに下処理にかかる。とび魚特有の大きな胸ビレとしっぽを切り、頭を落として開き、内臓を丁寧に取り除く。開き方には背開きと腹開きがあり、地区によって違うという（飛鳥には勝浦、中村、法木の三地区）。開いたとび魚はノマと呼ばれる平ざるに並べて、2時間ほど天日干し。その間に朝食をとり、浜で炭をおこして、テント張りの中で一匹ずついねいに、こんがり焼き目がつくほどに炭火焼きする。作業は家ごとで、女性（漁師の妻）が主に焼き、男性（漁師）が周囲で段取りしたり運んだりする。大漁であれば、数百匹から千匹超、その日のうちに処理するこ

とが必要だから、ときに三千匹というような日は、近所に応援を頼み、それでも夕方暗くなるまで作業することもあるという。飛島の漁師の平均年齢は65歳を超えており、高齢夫婦のみの世帯も多く、重労働であることから、「つらい」「たいへんだ」という声が聞かれる。後継者不足は、何より大きな課題である。

公益社会演習の学生は、7月上旬の土日に1泊2日で飛島を訪れ、上の加工行程を体験するとともに、とび魚漁や飛島の現状等の聞き取り調査を行い、島民の方々との交流会（活動報告）も経験した。炭火焼きしながら、海水でほんのり塩味のついた熱々のとび魚を味見したり、同じ網で焼いたサザエやイカをごちそうになったりしつつ、よもやま話を聞かせてもらう。島の自然や風土を体感し、島民と触れあい、漁業や生活を肌で感じて理解が深まる。2010年度は、併せて滞在中の様子をビデオ撮影し、映像製作を行った。

## ② 「とび魚だしめんつゆ」の商品開発・製造

飛島で加工されたとび魚の焼干しは、山形県漁協を通じて集荷、JA山形農工連に納入され、だし取りに使用される。工場における「とび魚だしめんつゆ」の製造工程は、かえし製造（醤油、砂糖、みりん等を合わせて火にかける）→（1週間熟成）→だし取り（海洋深層水を煮立てとび魚だしを投入）→合わせ火入れ（かえしとだし液を合わせて火入れ）というものである。ここまでの製法は「本がえし製法」と呼ばれ、こだわりのそば屋などでは行うものの、市販のつゆでここまでの手間・日数をかけるところは少ないという。この後、オリ引き（濁りとなる成分を沈殿させる）→ろ過→官能検査→ホット充填（90度のままビン詰め）→ラベリング→保管となる。公益社会演習では、だし取りから充填までを工場内で見学・体験し、検査に用いる色度計の使い方等を学ぶ。できたのとび魚だしを五感で味わい、官能検査（味・香り・風味・清澄度のチェック）を体験して、全員で試食をしての意見交換、アンケート記入を行った。

食味については、このほかに、公開での試食会やメンバーによる利きだし会などを開催して、味のバランス等を検討し、改良を重ねてきた。

## ③ 販売戦略の企画・実施

まず、ネーミングおよびパッケージ（ラベル）について、学生たちが話し合

いを重ね、検討した。現在の「絶品とび魚だしめんつゆ 贅沢ストレート」に決定し、記者発表したのは、2010年6月1日である。飛鳥のとび魚という「とび」の音を強調し、魚のだしであることが一目で分かるよう、「とび魚」と表記することにした。白地に黒の文字で、高級感のある和風のパッケージが完成したのである。

つぎに、販売促進グッズとして、プロジェクトメンバーが商談会等で着用するための、スタッフTシャツのデザインを行い、制作した。2010年度は、青地の半袖Tシャツで、学生が描いたとび魚を大きく背中にデザインし、左胸にプロジェクト名を入れたものである。2011年度は、図柄は同じで、白地の長袖・両袖のみ黒のTシャツとした。秋冬の商談会等で着用できるよう、また、半袖と組ませることもできるようにデザインしたものである。この長袖Tシャツは、7月の飛鳥合宿の際に漁師さんからほめられ、その後、お世話になった漁師さん全員にお礼の気持ちをこめてプレゼントした。

飛鳥での聞き取り調査等をもとに、学生たちが主体となって、パンフレット(A4判三ツ折・四色刷り)を作成した。まず「ストーリーを伝えたい。」というプロジェクトの概要、とび魚だしめんつゆの特長や学生たちの活動などを伝えるページ。そして、とび魚漁から加工にかかわる飛鳥の漁師、製造にかかわるJA山形農工連、販売促進にかかわる学生という三者のそれぞれの想いが語られる見開きページ。さらに、とび魚だしめんつゆを使った新展開の「SKTバーガー<sup>6</sup>」のページを加えて完成、2012年3月の商談会から活用している。

とび魚だしめんつゆの使い途を広げ、新たなレシピづくりと地元へのとび魚だしのPRをねらった料理教室を、2011年2月に開催した。プロの料理講師に依頼したもので、すいとん等の料理が参加した子どもたちにも好評であった。

2011年度、学生たちの自発的・主体的な活動として際立っていたのが、6月の「新レシピ開発試食&交流会」である。公益社会演習履修生12名で、会の企画、会場の手配、レシピづくり、材料購入、当日の調理、サービス、後片づけに至るまで、すべてを自分たちでやりとげた。教員はじめ、JA山形農工連、山形県庄内総合支庁等の日頃から支援してくれる関係者、報道関係者等に料理がふるまわれた。メニューは、牛ごぼう煮、サラダスパゲティ、焼きおにぎり、冷や汁、バニラアイスのとび魚だしがけ。どれも「絶品とび魚だしめんつゆ」

を使用して味つけした。とくに好評を博したのが、焼きおにぎりである。炊飯の際にとび魚だしを炊き込み、握ってから、さらにだしを塗り、香ばしく焼き上げたというもの。この工夫により、とび魚だしの風味が十二分に生きる味となった。

#### ④ 商談会等での販路開拓・販促活動

2009年11月を皮切りに多数の商談会、食品関連の展示会・見本市等（東京、千葉、山形など）に学生たちが参加した。飛鳥、JA山形農工連工場という現場での体験や調査結果をもとに、バイヤー等に直接、とび魚だしのストーリーを語り、マーケティング調査、販促活動を行った。これをきっかけに成立した商談やサンプル注文も少なくない。大規模な商談会等では、学生の存在自体が珍しく、興味をひく存在であり、強みとなっている。

また、スライドやDVD映像による活動報告の場やイベント等でのとび魚だし販売にも参加して、プロジェクトの活動を発信してきた。

### 3 地域共創教育の成果

活発な活動を積み重ねてきたとび魚だしプロジェクト、そしてその一環としての「公益社会演習」の成果は何であろうか。1で言及した4つの視点のうち、自覚の視点からみた成果ならびに地域活性化の視点からみた成果について、検証していこう。

#### 3.1 自覚の視点からみた成果

自覚の視点は、学生自身による検証・評価であり、「自分がめざす人物像に近づいている実感を持てるか」「自分が目指す職業への自信を持てるか」「社会と自分との関係を鮮明に意識できるか」等である。端的に「学生自身の達成感・充実感」（白戸）と言い換えることができる。公益社会演習（とび魚だし）の学びと活動によって、学生は、飛鳥の漁師たちの熱い想いや手間暇かけた丁寧な炭火焼の手仕事にじかに接して、さらには「社会の変化」（後述する島の漁業構造の変化）を目の当たりにし、そこに自分たちが関与したという手ごたえと自信を得た。ある学生は、次のようにレポートに記している。

なんといっても飛島での漁体験と漁師さんへのインタビューがこの学習において私の考えに変化が起きた最大のターニングポイントだった。まずインタビューでは農工連の工場とはまた違った生産者達の「生の声」と情熱、そして生産物に対する絶対の自信とプライドを垣間見ることができた。「あご」ではなく「とび魚」、「九州地方で獲れるものとは質が格段に違う」という言葉からも「飛島だからこそ、そこにこだわる」という気概がとても伝わってきた。漁師の方1人1人に話を伺っても同様に口をそろえて「飛島のとび魚」を熱く語ってくれた。漁師の人々が絶対に譲れない誇りのようなものを感じ、私たちの宣伝がこの想いを踏みにじってはいけないという責任感も生まれた。これほどまでに漁師たちがこだわった材料を使用した商品をプロデュースできるのだから一層やりがいが増えた。

漁師さんが「あごとは違う、とび魚だ」と語ったことは、学生に大きなインパクトを与えた。飛島滞在中に、「あごだしプロジェクト」を「とび魚だしプロジェクト」に改名しようとの提案に皆が賛同し、それを漁師たちにフィードバックし、喜んでもらったのである。以後、プロジェクトは「とび魚だしプロジェクト」と名乗り続けている。

他方、工場におけるめんつゆの製造過程でのやはり手間暇をかけた「本がえし製法」や厳しい衛生管理や品質管理に接して、ものづくりにおける仕事の厳しさや責任を実感している。その経験が、「新レシピ開発&試食会」のように、学生が自ら企画・立案し、実践する独自の取組みをつくり出していく意欲につながったと考えられる。

演習においては、教員の指示のもとに行動していくわけだが、しだいに「動かされる」ばかりでなく、自ら考えて進んで「動く」ことへと、行動の変化が見られる。それは、真剣勝負の現場の厳しさとそのなかで温かいまなざしを持ちながら学生に正面から向き合って指導したり話をしたりしてくれる大人たちの姿という、現場のリアリティに接しての変容といえるだろう。漁業、食品製造・販売というビジネスの現場を踏み、そこで働く方々の真剣勝負の場に立ち会い、指導を受けつつ当事者としての体験ができたことの意味は大きい。そればかりでなく、ある学生は次のように述べている。

演習を行い一番驚いたことは、先輩たちが中心となって授業やプロジェクトを進めていることである。授業の流れや司会進行を自分たちが中心となって行っている姿がとてまかつよく印象的だった。さらに、話し合いをするときも、積極的に意見を言い合えるところも素敵だと思った。このような力はきっと、この公益社会演習やとび魚だしプロジェクトを通して身についた力なんだな、と思い、自分もこの演習を通して先輩たちのような力が身につけばいいなと思った。

上級生の姿が明確な目標（ロールモデル）として、下級生の目に映っているのである。

また、学生たちは、飛島の漁師たちやその家族との出会いのなかから「島で元気に長生きしてほしい」という思いや島の人びとへの理解・共感を深めている。そこから地域課題に気づき、どう行動すべきか、自分たちにできることは何なのかを考えた学生たちがいる。

飛島の課題として一番印象に残ったことは高齢化による漁師さんの減少である。飛島合宿の漁師さんのインタビューの際に高齢化による漁師さんの減少、後継ぎについての問題はどの漁師さんの話からも出た。この問題は漁師さんだけの問題ではなく島全体の問題と言えるだろう。……自分たちが広報活動や島のアピールをしっかりとやることで飛島の漁師さんは安心して飛び魚漁や焼き干し作りに集中できる、この問題解決のためのとびプロの役割はとて大きいと言えるだろう。

私が一番に考えたことは、学生自らの口でバイヤー、消費者に伝えるということ。飛島の漁師さんたちは、全員高齢者で体力的にもきつい中で、いっさい妥協をせずとび魚の焼干しを作っている。…こういう頑張っている人がいるから、私たちはプロジェクトを推進することができるのだと飛島合宿を通して痛感した。だから私は、商品のみるだけではわからない背景、どんな人が頑張っているかということを示し会や発表する場でPRしていきたい。

自ら考えて「動く」ことへの変容は、公益社会演習（とび魚だし）が目標とした、「調査・取材・課題発見」「ワークショップ運営・ファシリテーション・提案とりまとめ」「プレゼンテーション」「企画・立案」といったスキルの習熟に大きく影響する。たとえば、現場で出会った大人たちや先輩たちの姿に少しでも近づきたいと感じて意欲が高まれば、スキルの獲得への取組みはより積極的になる。実際にスキルの面で、学生たちの成長をみることができた。具体的には次のようなものである。

- ・コミュニケーション技法、ミーティングの技法
- ・現場におけるインタビュー調査の技法、記録作成
- ・課題発見の視点、課題提示の技法
- ・地域の関係者との座談会（ワークショップ）の実施
- ・写真撮影、まとめ・分析
- ・プレゼンテーション技術（パワーポイント作成、発表シナリオ作成、発表）
- ・レポート・報告書作成
- ・販売促進用のツール（Tシャツ、パンフレットなど）作成
- ・商談会等において説明・説得する技術（自らの言葉でストーリーを語る）

以上から、演習での現場経験によって主体的に行動する意欲が引き出され、その意欲がスキルの獲得にもプラスに作用し、結果として、学生たちの自発的・内発的な地域貢献へのさらなる意欲を引き出すことができたとまとめることができる。

ただし、学生の変容・成長は、一様であるはずはなく、学年やそれぞれの経験の度合いによって異なる。個人的な資質の違いもないとはいえない。むしろ、異なる学年の学生、そして多様な学生がいることが重要だと考えられる。各人がそれぞれの強みを発揮するとともに、弱みがあればたがいに補いあい協働するという、地域共創・協働を身をもって体験し、学ぶ場となり得るからである。経験や知識を積んだ上級生（経験者）が下級生（未経験者）に伝えられることがある一方で、経験が浅いからこそ、気づくことや新たな視点を提示できることもある。多様な人々と出会うなかで、違いを認めあいながら、尊重できる関係を紡いでいけるかどうか。仲良く和気あいあいと活動するばかりでなく（そ

れはそれとして大切だが)、ときには対立する意見をたたかわせ、たがいに鍛えあうなかで、個人が成長していくことのできる場が必要であろう。そのような場を設定し、見守り支援することが、教員に求められている。

### 3.2 地域活性化の視点からみた成果

では、飛島の島民（とくに漁師）および農商工連携業者（JA山形農工連、山形県漁協）にどのような影響を与えたのだろうか。見ていくことにしたい。

まず飛島の島民は、高齢化による後継者不足などの深刻な地域課題を実感しつつも、急激な変化をきらう傾向にあった。ところが、とりわけ漁師やその家族は、目に見えて「とび魚だし」が売れ、公益社会演習で島を訪れた学生たちが元気に熱心に活動する様子に動かされた。それが漁協への焼干しの出荷増へとつながった。2011年夏のことである。実は、数年前とび魚が豊漁だった年に、思うように漁協からの買い上げがなかったとして、漁師と漁協との関係は必ずしも良好ではなかった。漁師たちは、漁協以外の個人の出荷先を持つようになっていたのである。そこに学生たちが介在することで、状況を打開する道が開けた。むしろ、直接に効果をあげたのは、2011年飛島合宿に同行した漁協職員らが、漁師宅を1軒ずつ訪ねて、出荷を依頼して回ったことである。ただそれも、合宿を含めた学生たちの一連の活動があればこそ実現したことで、プロジェクトの動きが、島の漁師たちを動かしたということができる。この年の漁協への出荷量は格段に増え、JA山形農工連は、「絶品とび魚だしめんつゆ 贅沢ストレート」製造のための原料を一定量確保することができた。

つまり、地域住民だけでは動きだすことができずにいた課題が、学生たちのかかわりがきっかけとなって、動き始めたということである。地域を変えるのは「よそ者、若者、馬鹿者」とはよく言われることだが、まさに学生たちはそのような存在である。炭火焼等の場面で漁師たちに焼き方を教えてもらい、焼き立てのとび魚やサザエをほおぼりながら親しく言葉を交わして仲良くなるという、学生の強みが発揮されたのである。1軒のお宅に2、3人ずつ学生がお世話になり、その時の写真を同封した手書きのお礼状を送ったり、Tシャツをプレゼントとして届けたりといった交流が、その後も続いている。

このように、農商工連携業者（JA山形農工連、山形県漁協）にとっては、



2011年飛島合宿にともに参加したことによって、前者は、当面の原料確保という最大の課題をクリアすることができ、後者は、数年来の島民との関係改善を果たすことができた。飛島の漁業構造の変革にわずかながらも影響を及ぼしたといえる。

## 4 飛島をフィールドとした公益大の教育・研究・活動と 公益社会演習（とび魚だし）がもたらす意義

### 4.1 飛島との出会いと問題意識の発生

公益大における飛島をフィールドとした活動のはじまりは、公益大が開学した2001年7月に、飛島において「公益自由研究」（呉尚浩担当）という授業の夏合宿を行ったことをきっかけとしている。その合宿において、教員と学生たちは、島の大自然や島びとの暮らしの豊かさに触れ、筆舌に尽くし難い感動を経験するとともに、島の西海岸に膨大に堆積している、まさに“非公益的”な海ごみの存在と島の過疎高齢化の厳しさを目の当たりにした。

そして、この海ごみ問題を解決して、島本来の美しい浜、自然を取り戻し、地域の再生につなげたい。さらには、現代社会が必要としている「自然と人との共生のあり方の原点」ともいうべき、島の自然や暮らしの原風景のすばらしさを、より多くの方に伝えていきたいとの“公益の実現”へ向けての想いが生まれたのである。

折しも、同年より飛島クリーンアップ作戦が開始し、翌2002年からは、県、市、NPO、島民、大学、業界団体、海上保安部などが実行委員会を組織し、市民ボランティアを募集して開催する年に一度のイベントが定着した。2012年には第12回目を迎えるが、ようやくここ数年、本来の美しい砂浜が見えるようになってきている。

そこでは、当初2年間にわたり公益大生が実行委員長をつとめた他、ゴミ調査・事前準備への参加、ボランティア来島者へ対する島ガイドなどを学生が担い、毎年60名ほどの学生がボランティアとして参加してきた。

またその間、2003年には、全国的なNGOであるJEAN／全国クリーンアップ事務局（現一般社団法人JEAN）が呼びかけ、第一回「海ごみサミット」を

飛鳥と公益大で開催、その後毎年開催され現在に続いている。同サミットは、地域・NGO発信型の会議で、同じ課題を抱える各地域の行政・NPO、国の関係省庁、研究者、海外からの参加者等が一堂に会し、そこで漂着ごみ回収作業に共に汗を流し、現場から課題共有することで、全国的な問題解決の道を探る役割を果たしてきた。その流れの中で、NPOからの長年の提言が、超党派の国会議員による立法へとつながり、2009年7月に「海岸漂着物処理推進法」が国会で成立。責任の明確化や発生抑制へ向けての法律が整備された。これらの動きの中でも、飛鳥のクリーンアップ活動は全国モデルとして常に発信され、影響を与えており、酒田市にあるNPOパートナーシップオフィスもJEANとともに中心的役割を果たしている。また、公益大の教員、学生も海ごみサミットには継続して関わってきた。

#### 4.2 海ごみ問題から島づくり、そして島と島との交流へ

さらには、大学としての飛鳥への関わりは、海ごみ問題から島づくりへと広がってきた。これまでに教員や学生が主体となって、島民・行政・島の応援団・他島とも共創して関わってきた活動には、2003年における離島振興計画策定時の調査、いきいき体験スクールなどの飛鳥における総合文化自然体験活動プログラムの実施やスタッフ参加、天保そば&ごどいも収穫感謝祭の運営（実行委員会形式）、飛鳥音頭・飛鳥小唄の復活、トビシマカンゾウ保全活動の実施、交流・共創拠点「しまの家」の運営、東北離島懇談会の開催（2005年、宮城県の田代島、網地島との交流会を飛鳥にて開催）<sup>7</sup>、三島交流会の運営協力（2007年から毎年、新潟県佐渡・粟島、飛鳥）などがある。

これらの活動は、第二回やまがた景観賞・経済同友会賞を受賞するとともに、天保そば&ごどいも収穫感謝祭は、国土交通省の「しまの宝100景」に選定されるなど、県内外において評価されてきた。

また、2008年には、公益大教員の呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、当時大学院生の林久美子、柴田大輔を中心に「山形県離島振興推進調査（社会環境編）」<sup>8</sup>を実施し、その際に提案した、介護システムの再構築、飛鳥小中学校の再開、島内交通の改善、移住促進政策の実施、三島交流会の実施、交流・共創拠点「しまの家」、新たな合意形成の場づくりなどの多くが、現在、現実のものとなっ

ている。

特に、2007年7月開催の海ごみサミット・佐渡会議を契機に、佐渡・粟島（新潟県）、飛島において年に一度、自然資源を活かした地域づくりを島民同士が学び合う「三島交流会」が同年スタートした。それと機を同じくして、三島を結ぶ観光航路も実現し、粟島でも飛島のノウハウを生かしたクリーンアップがはじまるなど、海の道を通じた交流・学び合いが盛んになっている。また、隣島の地域づくりへの熱心な取り組みにも影響され、数人の島民と学生が中心となってはじまった「トビシマカンゾウ保全」が、住民主体の活動へと発展し、飛島の内発的地域づくりの象徴的活動となっている。

さらには、今後の島づくりの流れを大きく前進させていくためには、未来の島づくりへ向けての合意形成システムの創出が喫緊の課題である。それについては、インフォーマルな井戸端会議的な合意形成の場として発想され2008年にはじまった交流・共創拠点「しまの家」の実施と、公的な合意形成の場として企画され、島民・島の応援団（大学・NPO等）・行政の共創で島の未来を話し合い行動する「とびしま未来協議会」<sup>9</sup>が2011年5月に発足したことの意義が大きい。

#### 4.3 「とび魚だしプロジェクト」が島づくりへ与えるインパクト

以上紹介した公益大が中心に関わってきた従来の活動と「とび魚だしプロジェクト」は以下の意味で異なる特徴をもっている。

- (1) とび魚だしを原料にするということで飛島に関連がありながらも、農工商連携の枠組みは島外でのブランド品開発の動きとしてはじまったこと。
- (2) 参加学生の関心も、当初は島に対する関心というよりは、商品開発や販売促進にあったこと。
- (3) とび魚だしは、飛島漁業の主要産品であるとび魚を扱っており、ほとんどが漁民で構成される島の経済に大きな影響をもたらす可能性があること。

従来の活動は、島づくり活動の公益性、内発性に主に焦点を当てたものであり、合意形成や新たな交流の場の創出、環境保全・自然体験活動、情報発信、離島振興関連の調査・政策提言活動など、なるべく個々の経済的利害関係が生じる事業や主要産業である漁業に関する分野には関わってこなかった。

それに対し、この新たな「とび魚だしプロジェクト」は、まさに島外者主導で島の特産品を原材料とした商品の販売促進を目指す活動としてスタートしている。しかし、当初より関係者の中では、飛島の島づくりへの貢献が企図されており、公益大が関わる従来の島づくり活動と連携することにより、その実現への道が開かれた。

具体的には、夏の公益社会演習合宿などにおける「とび魚の焼干しづくり」体験、旅館・民宿への販促活動などで、その存在が島民に浸透するきっかけとなったことが大きい。それに加えて、2011年度から参加の仙山交流味祭や、2009年度からの参加のアイランダー（国土交通省・財日本離島センター主催、池袋サンシャインシティにて開催）において、島民自らの手でとび魚だしを販売したことで、「島の産品」であるとの意識が醸成されてきた。そして、2012年度のとびしま未来協議会の主要事業としてとび魚だし関連の事業が実施されることによって、当初の予想以上の大きな影響を島に与えつつある。

その事業<sup>10</sup>とは、「とびしまブランド開発」と「しまCafé」の実施である。「とびしまブランド開発」とは「とび魚だしめんつゆ」と「天保そば」をセット販売することで、飛島の顔となるようなお土産品を開発し、島内と島外で限定販売するものである。

「幻の山形天保そば保存会」（山形県内の蕎麦店、製麺会社などが主なメンバー）が、種の保存の目的で飛島において栽培している天保そばは、幻のそばとして小学館のビッグコミックに掲載された『そばもん』（山本おさむ）にも取り上げられ知名度が向上している。しかし、残念ながら「とび魚だしめんつゆ」を含めて、これらの特産品は飛島島内では手に入りやすく、飛島の観光活性化にはあまり活かされてこなかった。そこで、本事業では、この二つの特産品を活用し、パッケージやマーケティング方法の工夫により、飛島のPRにつながる新しいしくみを開発することによって、漁業・観光業の再生や新しい産業・雇用創出につなげ、離島振興を図ることを企図している。

また、「しまcaféプロジェクト」とは、来島者や島民の新たな交流空間として、島の地域資源を活かしたカフェを実施するものである。飛島では、観光シーズンである夏の時期に、海水浴場付近で海の家を島民が営業していたが現在はなく、観光客からも島民からもリニューアル・オープンが期待されてきた。

ちなみに、2008年から飛島で夏期限定開設している「しまの家」は、東北公益文科大学・とびしま未来研究会が「山形県離島振興推進計画」で提案した内容にもとづいて、公益大生が主体となって実験的に始めたものである。内容としては、観光案内所、ガイド派遣、ギャラリー、サロンなどの機能を併せ持たせている。2010年には、国土交通省の「離島の活力再生支援事業」に採択され、特定非営利活動法人パートナーシップオフィスとの共創で開設している(2011年は、東日本大震災のため一時休止)。このしまの家の開設は、観光客へ対するサービス向上の役割を果たしており、また島づくりの拠点として島民からも高い評価を受けている。

そこで「しまcafé」では、島の食材を使った飲み物やスイーツ等(ex. SKTバーガー、とび魚だしジェラート、イカのんにく焼き、ごどいもバター焼き)を提供する「café」を開設し、観光客も島民も気軽に立寄れる憩いの場を提供するとともに、従来「しまの家」で行っていた島づくりの拠点機能、観光案内機能やギャラリーなども併せ持たせ、また上記の新しいお土産品など飛島独自の品物を販売することで飛島のPRにつなげ、交流人口の拡大、さらには移住者誘致につなげることを目指している。

#### 4.4 飛島における内発的地域づくりへ向けて

2012年度は、飛島において飛躍の年となることが期待されている。というのは、10年に一度の離島振興計画を策定する年であること、はじめて「緑のふるさと協力隊」隊員が派遣されたこと、新たにNPO法人パートナーシップオフィスの島づくりのスタッフが增強され、その内一名(岸本誠司氏、公益大非常勤講師、民俗学専攻)が島に常駐すること、その他にも若者のIターン・Uターン移住が実現したことで、その島づくりへの担い手と活力が増してきていることである。また、これらの動きに公益大の卒業生がNPOのスタッフ(渡部陽子、飛島出身)、とびしま未来協議会の事務局スタッフ(林久美子)として関わっていることは重要である。

そこで、飛島における地域づくり活動のこの12年間を3期にわけると、

##### (1) 2001年～2003年

飛島クリーンアップ活動、ごどいも食べさせ隊、天保そば保存会、東北

公益文科大学・飛鳥ふぁんくらぶなど、島の応援団による個別活動の開始。

(2) 2004年～2006年

天保そば&ごどいも収穫感謝祭の開始による応援団と島民の交流、および応援団同士の共創活動の進展。

(3) 2007年～2010年

三島交流会の始動による島民の内発的島づくりへの意識高揚とトビシマカンゾウ保全を象徴とする内発的島づくり活動の開始。インフォーマルな島づくり活動の拠点としての「しまの家」の実施。移住家族による介護システムの再構築と飛鳥小中学校の再開。

(4) 2011年～

島民・島の応援団・行政の公的な島づくりの合意形成の場としての「とびしま未来協議会」の誕生と自主自学の開始、移住促進。本格的な内発的島づくり活動と応援団によるサポート体制の始動。

そして、この新たな第4期の動きにおいて、「とび魚だしめんつゆ」の存在が、商品の価値としても、共創活動の関係性を深化させていく上でも、重要な役割を果たす可能性があるといえよう。

## 5 今後の課題

農商工連携等事業としてのとび魚だしプロジェクトは、4年目を迎えた。「とびしま未来協議会」への参画・協働等により、飛鳥の島づくり、地域活性化にこれまで以上にかかわり貢献しつつ、とび魚だしの販売促進に努めていくことが、プロジェクトの課題である。また、その一環としてのSKTバーガーの今後の展開等、新たな課題への対応が必要になっている。

教員の課題として、プロジェクトの一部を演習科目として設定する際の到達目標およびそれに照らした評価方法の検討があげられる。先に、公益社会演習における個人の到達目標として、「活動のなかで課題に気づいて設定し、それをみずから（仲間とともに）調べ学んで、解決策を模索するという学びの主体性の獲得」をあげた。実はこれは、最初から設定できたわけではなく、演習を進めるなかで気づいて設定していった到達目標である。今後、地域共創の学び

と活動にかかわる教員を中心に、到達目標とそれに照らして評価する手法について検討を進め、そのしくみを作っていきたいと考えている。ここでの試みは、拙く不十分であるが、そのための第一歩としたい。

学生たちは現場での体験を通じて協働・共創の技法（スキル）を磨き、仲間とともに「社会を変える」手ごたえを得て、自ら社会を変える担い手、主体へと成長していく。先輩から後輩へと徐々に世代交代をしていくなかで、継承されるものがあり、また新たに生まれてくるものもあるだろう。学生たちに寄り添いながら、ともに学び、ともに活動し、実践をふり返って（省察）、学生の成長を確認していくことは、このうえない喜びである。地域共創の学びと活動に関する実践研究をみずからに課し、学生とともに歩んでいきたいと思う。

---

<sup>1</sup> 詳細は、伊藤・小松（2006）および伊藤・大歳・小松（2007）を参照。

<sup>2</sup> 2012年3月4日「公益大ウィーク山形会場」（遊学館）におけるパネルディスカッション「大学生による地域共創活動の可能性」パネリストとしての発言、ならびに2012年3月10～11日「地域連携教育をめぐる評価・検証の研究会」（松本大学）におけるプレゼンテーション資料。なお、研究会のなかで木村氏は、「地域連携教育」を「公益大では地域共創の教育」と数回にわたって言い換えていて、公益大の実践を認めてくださっているという思いを強くし、おおいに励まされた。

<sup>3</sup> 三輪（2009）324-325頁。

<sup>4</sup> 本稿の内容は、両名が話し合っ得た結論をもとに構成したものである。実際の執筆は、伊藤が1、2、3、5、呉が4を担当した。

<sup>5</sup> 2011年度より「公益社会演習a・b」となった。繰り返し何度でも履修できるが、卒業単位としての認定は2科目（4単位）までで、1つ目の履修科目が「a」、2つ目の履修科目が「b」なる。なお、とび魚だしの演習は、定員15名であり、2010年度13名、2011年度12名が修得、2012年度18名の学生が履修中である。

<sup>6</sup> Sは庄内、Kは公益大、Tは飛鳥、とび魚、とびプロという意味づけのもと、学生たちが名づけたフィッシュバーガーの総称である。庄内浜の紅エビを使っ

たバーガー、イカのソーセージをはさんだドッグなど、多様な展開が図られ、今後の発展が期待されている。

<sup>7</sup> (財)日本離島センターと共催。

<sup>8</sup> 自然環境編は、山形大学農学部・林田光佑氏が担当。

<sup>9</sup> 会長は佐藤勝一氏（飛鳥コミュニティ振興会長）、事務局はNPO法人パートナーシップオフィス、公益大からは呉が事務局長を担う。飛鳥コミュニティ振興会など島内の主要機関・団体・法人・グループ、NPO法人パートナーシップオフィス、幻の山形天保そば保存会、とび魚だしプロジェクト、藻場再生研究クラブ、東北公益文科大学、山形県、酒田市などが主な構成員。

<sup>10</sup> 平成24年度「新しい公共の場づくりのためのモデル事業」（山形県）「観光おみやげ品開発助成事業」（酒田市）として採択。

#### 〔参考文献〕

伊藤真知子・小松隆二編著，2006，『大学地域論—大学まちづくりの理論と実践』論創社。

伊藤真知子・大歳恒彦・小松隆二編著，2007，『大学地域論のフロンティア—大学まちづくりの展開』論創社。

荻谷剛彦・西研，2005，『考えあう技術—教育と社会を哲学する』筑摩書房。

呉尚浩・澤邊みさ子・小関久恵・林久美子・柴田大輔，2008，「社会環境調査編」『平成19年度山形県離島振興推進調査（受託研究）報告書』東北公益文科大学、山形大学農学部、山形県庄内総合支庁総務企画部企画振興課。

呉尚浩・澤邊みさ子・小関久恵他，2008，2009，2010，2011，『とびしま未来プロジェクト報告書』東北公益文科大学・とびしま未来研究会、酒田市大学まちづくり政策形成事業（受託研究）。

呉尚浩，2009，「ごみの交流から花の島づくりへ（前編）～とびしまの未来を考える～」『季刊しま』（財)日本離島センター）No.218。

呉尚浩，2009，「ごみの交流から花の島づくりへ（前編）～島々の心をむすぶ～」『季刊しま』（財)日本離島センター）No.219。

呉尚浩、澤邊みさ子、小関久恵、林久美子、柴田大輔，2009，「内発的地域づくりにおける『公益的な民の力』の果たす役割～山形県酒田市飛島に事例



- を中心に～』『日本公益学会2009年度大会予稿集』(2009年9月、東北公益文科大学).
- 呉尚浩, 2011, 「海岸ごみの問題」中島勇喜・岡田譲編『海岸林との共生』山形大学出版会.
- 財団法人日本女性学習財団編集, 2006, 『協働の時代の学びと実践 学習支援ハンドブック』財団法人日本女性学習財団.
- 白戸洋, 2012, 「地域連携教育をめぐる評価・検証—個々の活動そのものに関する評価・検証」(3月11日松本大学「地域連携教育をめぐる評価・検証の研究会」発表資料・未公刊).
- 柴田大輔, 2012, 「離島の地域づくりにおける『公益的な民の力』の果たす役割について—山形県飛鳥と新潟県粟島の事例研究から—」(東北公益文科大学大学院修士論文2012年度).
- 林久美子, 2006, 「離島における内発的地域づくり—山形県酒田市飛鳥に事例を中心に—」(東北公益文科大学大学院修士論文2006年度).
- 三輪建二, 2009, 『おとなの学びを育む—生涯学習と学びあうコミュニティの創造』鳳書房].
- 三輪建二, 2010, 『生涯学習の理論と実践』財団法人放送大学教育振興会.